

アノニマスという匿名的なエネルギー変革

一般社団法人 光楓座
一般社団法人 e f c o . j p

代表理事 佐藤建吉

Anonymous-style

「アノニマス」という言葉を、著者は最近注目している。第1のアノニマスの例は、コンピューターにおけるハッカー集団、あるいはインタネットに匿名として投稿する人の集合に対する名称である。「アノニマス」は、「匿名の」…アノ(否定) + ニマス(名前の)という語源に由来している。彼らは、集団の広い守備範囲から、情報開示やイスラム国(IS)などに対して、正義感ある活動を行っている。第2には、無名の、あるいは作者を特定できない自然発生的なアート作品を指して「アノニマス」という。日本建築美術工芸協会(AACA)の調

査研究委員会では、公共の場に登場するアート作品などの意義や特性について、著者も参画してパブリック・アートを調査対象としている。アノニマスも対象としている。パブリック・アートは広い言葉であるが、人工物・作品だけでなく、天然・自然に由来するものも含まれる。私見として、砂丘にみられる風紋、そして富士山も挙げたい。いずれも、自然が生み出した繰返ししの紋様、そして均整がとれた安定感、人間の技巧を超えた自然作品であり、アノニマスといえる。また、季節の変化が作り出す春の桜、6月の藤の花も、アートといえる。藤では藤棚は、人工物として、その花の持つている粋を何倍の高めてくれるパブリック・アート作品である。それは、人間と自然との融和した芸術(アート)である。

また、日本酒製造の現場で醪(もろみ)の発酵時に生じる炭酸ガスの泡は、美しいアートといえるが、この時点では、パブリックではない。また、火山の火口で定期的には噴出するマグマの溶融物、その形状と変化は、自然の摂理に支配された変貌するアートとい

とが出来る。この自然が産み出した現象をアートとし、それに公共性を重ねれば、「パブリック・アート」と、とらえることができるようになる。

第3は、パブリック・アートについてのもう一つの視点である。それは、社会や時代が日進月歩で変化しているの、その変化を作り出しているのは、個人の作家ではない。したがって、多くの作家が関係しているパブリック・アートの現状が、匿名性(アノニマス)と解釈できる特徴を作り出している。この状況は、次に述べた、季節の変化が作り出す春の桜、6月の藤の花にも見出すことが出来る。

▼エネルギーの利用と進歩は「匿名」的

エネルギー利用の現実あるが、主流は、社会や時代に左右される。わが国では、明治以降は水

くることが始まる。まず、流木の木組みを、空気の流れ、炎の流れ、熱の流れなどを考えて手続きしなければならぬ。拾い集めた流木をただ山積みしても、着火もしないし、燃え盛ることもない。しかし、流木であっても驚くほど火勢を保ち燃やすことができる知恵者がいるのである。

力、そして火力が主流になり、戦後、原子力が大幅に導入されたが、3.11により停止され、代わりに再生可能エネルギー(いわゆる自然エネルギー)が大幅に拡大している。人類のエネルギー利用の始まりを考えれば、「火の利用」は、今から150万年以上前であり、それは、まさに匿名的(アノニマス)であった。地上のあらゆるところで、火の燃やし方が、次第に、技術として習熟していったと思われる。著者は、「技術とは、経験を通して獲得した対象行動への優れた適応力」と解釈している。

最近、著者は、木の髄まで水に濡れた流木を燃やすことができることを知った。それは、地元のボランティア活動として、養老川の遊歩道の清掃活動に参加して、炎が

燃え盛るようになるためには、まず種火をつ

けるような新しい潮流は、全般としてとらえる。アノニマスなエネルギー利用の表情といえる。

▼エネルギー変革期に主体的に行動する重要性

以上のように、著者は、エネルギー利用において重要なことは、アノニマス観が大事であると考えている。その鍵となるのが、自然を尊重する精神であると、考えている。そのシンボルとして著者は、「森の知恵者」と言われるフクロウを挙げている。同時に、人間も直接的に関わる必要がある。その実像として、南米チリの画家ウィクタール・カスティロのフクロウとピノキオが描かれた一枚の絵を購入した。イメージは、フクロウと、森の冒険者のピノキオの存在である。



「森の知恵者を腕に留まらせるピノキオ」(Victor Castillo, 2011, "Superstition")

関連して、いま「火育」という言葉があり、子どもたちに「火の利用」を教えるキャンプ体験である。それは、エネルギーの重要性を、人類の原点として熱というエネルギーの典型を知るうえで、意義や効果のある体験である。同時に、火育はアノニマスを気づかせる。個人や社会が、エネルギーの選択を、主体的に行うことが必要であると、著者は考えている。この時、匿名性、匿名的である「アノニマス・エネルギー」という新しい視点は、変革の進歩を考える上で大切ではないだろうか。